

機関番号：12501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20530587

研究課題名（和文） 幼児期初期から後期にかけての他者理解の発達過程に関する観察・実験的研究

研究課題名（英文） The Developmental process of Young children's understanding others: An observational and experimental study

研究代表者

岩田 美保（IWATA MIHO）

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：00334160

研究成果の概要（和文）：本研究の大きな目的は「幼児期初期から幼児期後期にかけての他者理解」について言語行動と社会的文脈におけるコミュニケーションに着目し、検討を行うことであった。本研究では、幼児・児童の園や家庭でのやりとりに関する横断的・縦断的観察データの収集・分析と、物語の登場人物の内的状態への言及について調べるための実験の施行・分析を行い、学童期への連続性も視野に入れながら、幼児期全体に渡る他者理解の発達過程について検討を行った。

研究成果の概要（英文）：The main purpose of this study was to investigate developmental process of young children's understanding of others' internal states. Two topics were addressed in this study: (1) young children's naturally occurring internal states expression in their close relationships with their parents, siblings, and friends during unstructured observations; and (2) young children's references to characters' internal states on narrative tasks. The data was recorded in longitudinal studies and cross-sectional studies. The developmental process of young children's understanding of others' internal states is discussed in terms of continuity to childhood.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：他者理解、内的状態、コミュニケーション、社会的文脈、関係性、言語行動、会話、談話

1. 研究開始当初の背景

(1) これまで、幼児の他者理解は実験的な検討(J.Piaget; H.Wimmer & J.Perner 等)を通じて、少なくとも4歳未満の幼児には他者理解能力が欠如しているとする点で研究者間で概ね一致をみてきた。しかし、実験状況によっては子どもの能力が発揮されにくいことも指摘されており、子どもの能力を正確に把握する上で、低年齢児でも適用可能な課題の作成は必須である。

(2) 物語を用いた実験的検討の必要性：いわゆる「心の理論」の研究領域では、他者の行動の背後に心的なものを想定したり、心的なものを勘案して他者の行動を予測することが他者の心の理解の指標となることが示されており、物語の中の主人公の行為やその背景となる心的状態について幼児に尋ねることを通して幼児の他者理解を検討できる可能性がある。こうした点について他者理解の研究領域ではまだ焦点化された検討はなされておらず、検討の余地は大きい。

(3) 社会的文脈での行動観察の必要性：日常的な文脈では乳幼児がごく早期から身近な他者と情緒的なやりとりを行い、2歳前頃から他者の心的状態に言及することや、そうした言及と他者理解とが関連することが示されてきた(Bretherton & Beeghly,1982; Shatz,Wellman & Silber,1983 など)。近年では他者理解と言語発達の関連の重要性を今一度強調する見解もみられており(Astington,1999,2005、内藤、2007)、日常的な文脈の中での身近な他者とのコミュニケーション場面における幼児の他者理解に着目し、言語を含めた行動観察に基づいて調べることは極めて重要であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の大きな目的は「幼児期初期から幼児期後期にかけての他者理解」について言語行動と社会的文脈におけるコミュニケーションに着目しその発達の仮説を実験と観察に基づいて見出すことである。

具体的には、幼児・児童の園や家庭での仲間や家族との日常的なやりとりについて横断的・縦断的観察を行うとともに、物語の登場人物の内的状態への言及プロセスを調べるための実験を施行し、学童期への連続性も視野に入れながら、幼児期全体に渡る他者理解の発達過程について検討を行う。

3. 研究の方法

(1)家庭での自然なやりとりにおいて、他者理解を支えるものとしての家族の会話・コミュニケーションがどのようになされている

かについて調べるために、幼児・児童期の3人きょうだいを含む1家族の夕食場面の4年間の縦断観察データ(この期間のきょうだいの年齢段階は長男(小3~小6)、長女(小2~小5)、次男(年中~小2)にあたる)に基づき、最年少の弟(年中・5歳)の就学移行期(小1の秋)にかけての母子4者間の他者理解に関わる会話・コミュニケーションの発達的变化について検討した。また、最年少の弟の就学移行期を含む2年間における、平日を中心とする母子4者間と休日を中心とする父母子5者間の夕食時のコミュニケーションにおいて話題となる他者や、ポジティブ・ネガティブな感情への言及を含むコミュニケーションがどのように異なるかについても検討を行った。

(2)園での仲間同士の自然なやりとりにおいて、どのような他者理解にかかわるコミュニケーション(特に自他の感情への言及を含むやりとり)がなされているかについて発達的な検討を行うために、2009年11月に東京近郊の保育園児(1~3歳児クラス)の昼食場面の横断的観察を行った。また、2010年4月から2011年5月(現在)まで、1年以上にわたり千葉県にある幼稚園の3歳児・4歳児・5歳児クラスの園児を対象とし、朝の自由遊び時間(約2時間)における室内および屋外(一部の遊具等を中心とする)において、幼児の仲間同士のやりとりの縦断的な参与観察を行った(観察は現在も続行中である)。双方のデータについてプロトコルデータ化を行った。幼稚園のデータに関する本報告の分析対象期間は、2010年4月から6月の全4回分であり、総時間数は、3歳児クラスが81分、4歳児クラスが109分、5歳児クラスが91分であった。園での仲間遊びにおいて、自他の感情についての言及が含まれたやりとりがどのようなやりとりの文脈でみられるのか、また、それが年齢段階により、どのように異なるのかについてその様相を調べた。

(3)これまでに得られている、絵図版を手がかりとした物語再生課題(うさぎが主人公のストーリー(ファンタジー的内容)及びきょうだいが主人公のストーリー(現実的内容)で構成される、以降、うさぎ課題、きょうだい課題と記す)における幼児(3~6歳児)の物語再生内容について、物語の登場人物の「感情」への言及に着目し、新たな視点で再分析を行った上で、同データとの比較を行うことを目的とし、絵図版を用いた物語再生実験を千葉県にある小学校児童(2年生)30名に施行した。

さらに、絵本の続きについての「お話づくり」を求める作話実験を幼稚園児40名(男

女各 20 名)、児童 (小学 2 年 60 名 (男子 30 名、女子 30 名) 5 年 60 名 (男子 30 名、女子 30 名) を対象として行った。実験に使用した絵本は「まよなかのだいどころ/モーリス・センダック作・神宮輝夫訳」、「はじめてのおつかい/筒井頼子作・林明子 絵 福音館書店」であった。幼稚園児のデータについては、絵本とビデオ映像という提示方法の違いによって幼児のお話づくりにおける登場人物の内的状態(「知覚」・「感情」・「欲求」・「認知」)への言及に違いがみられるか検討を行うために、絵本を原作としたビデオ教材(世界絵本箱 4 「かいじゅうたちのいるところ」ヤマハミュージックメディア)も合わせて用いた。

4. 研究成果

(1) 他者理解を支えるものとしての家族の会話・コミュニケーション

3 人きょうだいの最年少児(Y, 5 歳)の就学期にかけての母子 4 者間コミュニケーションの発達の变化: 会話の全体的な変化として、Y が就学期をむかえると、Y の発話量が増加し、母を軸とした母子 4 者間のやりとりがより活発となった。また、Y の就学期前には Y と兄弟との教示的なやりとりが多くみられ、Y の就学期では就学期前からみられた『出来事の回想や人の行為や内的状態等』に関するやりとりが Y と母や兄弟との間で中心となった。このことから、就学前の早い時期から、学校への適応に重要と思われる学校教育にも広く関わる知識や教養についてのやりとりや、他者理解に大きく関わりとえられる学校での経験や教師・友人に関する内容を含むやりとりがなされていること、また、特にそうした、学校や教師・友人に関わるやりとりは、Y の環境以降を伴う就学期にかけて母子 4 者間で増加することが窺えた。

また、Y の母・兄弟間の会話への参入についても変化がみられた。観察開始直後 (Y の就学期前/1 期) では効果的な参入に結びつきにくい参入コメントを用いた参入が中心であったが、就学期にかけて、話題の文脈に沿った効果的な参入や兄弟や母との一定のテーマに沿った会話の継続がより一層可能になることが示された。さらに、Y の自主的な参入コメントへの応答に関し、母はより受容的な応答がみられ、文脈に直接的にはつながらない参入コメントに対しても多様な応答がなされるなど、母ときょうだいの関わりの違いが示唆された。

母子 4 者間・父母子 5 者間の夕食時の会話で話題となる他者: きょうだい 3 人が学童期となった 2 年間の夕食時の会話で、母子 4 者間、父母子 5 者間に共通していたこととして、「友人」に関する言及が母子間で他者につい

ての言及全体のうち 44.4%、父母子間で 41.1% を占め、突出して多くみられたこと、次いで、「友人のきょうだい」についても比較的良好に言及されていたことが挙げられた (母子間・父母子間ともに 9.3%)。一方、父母子 5 者間に特徴的なこととして、家族全員が話題にできる、「アニメ・漫画のキャラクター」についての言及の割合が高いこと (17.3%)、また、母子 4 者間ではみられなかった「社会的な人物 (政治家など)」(6.7%)、「スポーツ選手・芸人」(2.7%) 等、より社会的な他者についての言及がみられたことが挙げられた。また、母子 4 者間に特徴的なこととして、「学校の教師」(11.1%)、「親戚」(9.3%)、「園の教師」(4.6%)、「園の友人」(4.6%)、等、過去の経験も含む身近な他者についての言及の割合が父母子 5 者間と比べて高かったことが挙げられた。こうした家族内での食事メンバーが異なることによる、他者の話題の多様性は他者理解を支えるものとしての家族の会話として重要であると考えられた。

(2) ポジティブ・ネガティブな感情についての家族の会話・コミュニケーション

母子 4 者間・父母子 5 者間の夕食時においてネガティブな感情が話される話題: きょうだい 3 人が学童期にあたる 2 年間を通じて母子間、父母子間に共通して自他のネガティブな感情が話された話題は「友人の特技や言動」に関する話題であった。総じて、友人や家族に関わる話題は、ネガティブな感情について親子がよく話す話題であるといえた。また、きょうだいが小 1・小 4・小 5 期では、母子間、父母子間とも「勉強や授業内容・授業科目」、「体育・スポーツ」、きょうだいが小 2・小 5・小 6 期では、母子間でテレビの話題、父母子間で世の中の事件といったより幅広い話題の中でネガティブな感情について話されるようになった。これらにより、兄弟が高学年児に入る時期には、母子間・父母子間ともに、身近な話題からより社会的な話題の中で自他のネガティブ感情が話されるようになるといえた。

母子 4 者間・父母子 5 者間の夕食時におけるポジティブ・ネガティブな感情言及の違い: 母子 4 者間におけるポジティブ及びネガティブな感情言及割合は母 (ポジ 29.8%, ネガ 70.2%)、S (ポジ 10.8%, ネガ 89.2%)、M (ポジ 20.0%, ネガ 80.0%)、Y (ポジ 11.1%, ネガ 88.9%) 父母子 5 者間では、父 (ポジ 20.7%, ネガ 79.3%) 母 (ポジ 33.3%, ネガ 66.7%)、S (ポジ 37.0%, ネガ 63.0%)、M (ポジ 45.5%, ネガ 54.5%)、Y (ポジ 50.0%, ネガ 50.0%) であり、父母子 5 者間の Y を除き、いずれもネガティブな感情言及割合がポジティブな感情言及割合を上回っていた。ま

た、母ときょうだいでは、休日を中心とする父母子5者間と比べて、平日を中心とする母子4者間の会話においてネガティブな感情への言及割合がより高いことが窺われた。

さらに、母子4者間・父母子5者間ともに、ポジティブな感情会話と比較して、ネガティブな感情会話においてより他者の感情への言及がみられた(図1)。他方で、ポジティブ感情会話における他者言及は、父母子5者間でより多く、また、ネガティブ感情会話における他者言及は母子4者間でより多くみられる傾向も示唆され、話者メンバーの違いによる話題性の違いの影響や、他者感情理解に関わる会話が両者間において異なる文脈で行われている可能性が窺われた。総じて、ネガティブな感情に関する会話は、幼児期のみならず学童期の他者理解を支える上でも重要な意味をもつと考えられること、母子間と父母子間という食卓を囲むメンバーの違いにより、そうした会話に異なる特徴がみられることが示唆された。

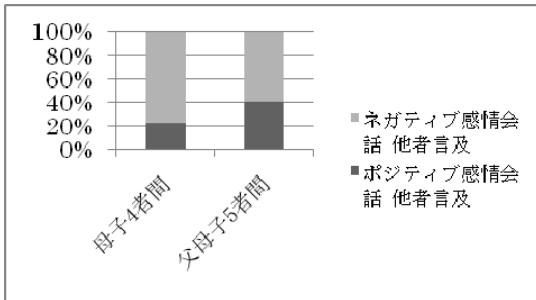


図1. 母子4者間・父母子5者間におけるポジティブ・ネガティブ感情会話での他者言及割合

(3)他者理解に関わる園での仲間同士のやりとり：やりとりの中での自他の感情への言及量およびその中で他者感情言及が占める割合は年齢段階が上がるほど増加した(図2)。また、自他の感情への言及がみられる文脈についても年齢段階が上がるほど多様になるといった。4歳児クラスでは、<遊び(ふり以外)の設定・提案>、5歳児クラスでは<ふりの共有>がそうした感情言及が最もみられやすいことが推察された(図3)

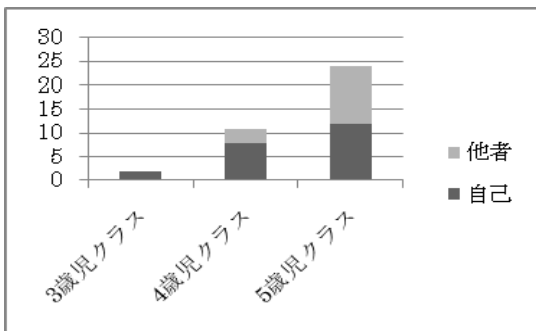


図2. やりとりにおける自他の感情への言及割合

割合

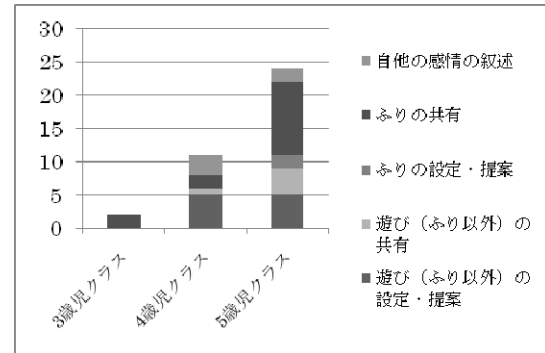


図3. 自他の感情への言及がみられたやりとりの文脈

(4)物語再生・作話実験における登場人物の内的状態への言及

物語再生課題における幼児の登場人物の「感情」への言及：登場人物の「感情」への言及には性差がみられた。女兒においては、年少児から課題を問わず登場人物の感情について一定の言及がみられ、特に年長女兒ではきょうだい課題においてそうした言及が顕著であった。一方で、男児においては、特に年長男児において2課題を通じて登場人物の感情への言及が少なかった。この一因として、特に、きょうだい課題における、『泣き出した弟を兄がなぐさめる』といった現実的なストーリー展開が、この時期、ごっこ遊び等において、生活場面のエピソードの再現も多くみられる女兒にとり、より親しみ易かったことが影響した可能性が考えられた。

お話づくり(作話課題)における幼児の登場人物についての内的状態への言及：内的状態について言及された登場人物は、主人公以外に、非主人公の「パン屋のおじさん」・「コックさん」、想像上の、「町の人」、「世界の人」等が挙げられた。総じて、絵本群の女兒が、お話づくりにおいて、登場人物双方(主人公・非主人公)に言及しており、より多様な他者の心に言及しているといえた。

さらに、登場人物の内的状態のうち、「感情」への言及には性差がみられ、女兒において、「感情」についての言及は他の内的状態(「知覚」、「欲求」、「認知」)についての言及より多かった。女兒のお話づくりにおいて「感情」への言及が多かったことは上記①の検討結果を含む、これまでの検討結果を支持する結果であった。

(5)総括と今後の展望

①総括：本研究の大きな意義として、これまでの研究が非常に少なかった、家族やきょうだい間、園における仲間間といった、社会的文脈の中での日常的なやり取りの中で、自他

の心についての「ことば」を含むコミュニケーションがどのようになされているかについて焦点的な検討を行うことができたことが挙げられる。それを通じて、他者理解を支えるものとしての家族の会話や、他者理解に関わる仲間同士のやりとりの文脈等について示唆を得ることが可能となった。

家庭場面の縦断的検討より、きょうだい3人が学童期となる時期には、母子4者間の会話の内容やコミュニケーションのあり方がそれまでと比べて大きく変化すること、同時に、他者理解に関わる会話もより深まることが推察された。また、それを可能にする、橋渡し役としての大人(母親)の役割の重要性が窺えた。さらに、夕食時の会話メンバーの違い、すなわち平日を中心とする母子4者間と休日を中心とする父母子5者間では、話題となる他者やネガティブな感情への言及など他者理解に関わる会話に違いがみられることも示唆された。今後は、こうした、関係性の違いによって生じる他者理解に結びつくやりとりのパターンの違いや、学童期における学校という場での他者とのポジティブ・ネガティブな感情経験含むやりとりが家族間でどのようになされるのかについて他の多くの家族のデータもふまえて、他者理解を支えるものとしての家族の会話・コミュニケーションについて、さらに研究を展開していく必要があるであろう。

仲間間では、幼稚園での観察から、年齢段階が上がるにつれて、他者の感情への言及割合が増加し、そうした言及がみられる文脈も多様になることが示唆された。幼稚園での縦断的観察は現在も続行しており、その後時間的経過に伴いどのようにそうしたやりとりの文脈が変化していくのか、今後も焦点をあてて検討を行う必要がある。また、現在分析中の保育園児(1~3歳児)の横断的観察データの分析結果も統合し、幼児期全般の発達プロセスについて、さらに明らかにしていくことが望まれる。

さらに、物語を媒介とする実験的検討により、登場人物の内的状態、特に感情言及において性差が一貫してみられる可能性が示された。女兒と男児では家庭での感情に関わるコミュニケーションが異なることも多く指摘されていることから(Dunn, et al,1987; Brody, 1999等)、今後はこうした性差についての観点もふまえて実験的な検討を行うとともに、日常場面での観察も含めて検討を行っていく必要があると考えられた。また、映像媒体ではなく、絵本を用いた提示がより多様な他者についてイメージを作り上げることを促す可能性も示唆された。これらの実験結果は、保育・教育場面でもさまざまに試みがなされている「お話づくり」や物語を介した活動と他者理解の発達との関わりについ

て捉える上での一つの手掛かりを与えてくれるものであろう。現在、児童を対象とした作話実験結果について分析を行っているところであり、今後学童期にかけて言及プロセスがどのように発達的に変化していくのかについて、より明らかになることが期待される。

②今後の展望：今後は本研究結果をベースとしながら、幼児期から2次的信念の理解が可能になるとされる児童期中期にかけての他者理解の発達プロセスについて、社会的相互作用および言語的側面に着目し、さらに発展的に検討を行っていく。現在すでに、研究(平成23~25年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 幼児期から児童期中期にかけての他者理解—社会的相互作用と言語的側面に着目して(課題番号23530847))の準備に着手している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

岩田 美保 学童期のきょうだいをもつ家族の夕食時の会話—母子4者間・父母子5者間で話題となる他者—。千葉大学教育学部研究紀要、査読無、59、2011、43-45。

岩田 美保・大元 千紘 年長児のお話づくりにおける登場人物の内的状態への言及—絵本の提示方法の違いに着目して—。千葉大学教育学部研究紀要、査読無、58、2010、51-54。

岩田 美保 ある5歳男児の就学期にかけての家族間コミュニケーション：母・兄妹間会話への参入過程に着目した夕食時の会話の縦断的検討。発達心理学研究、査読有、20、2009、264-277。

〔学会発表〕(計5件)

岩田 美保 児童期の他者理解を支えるものとしての家族の夕食時の会話—母子4者間・父母子5者間でポジティブ・ネガティブな感情への言及がどう変わるか—、日本発達心理学会第22回大会、2011年3月25日、震災により、大会は成立したものとするが開催期間に会場(東京学芸大学(東京))には非参集の措置。大会論文集にて報告。

岩田 美保 学童期の他者理解を支えるものとしての家族の会話—母子4者間・父母子5者間におけるネガティブな感情が話される話題—、日本家族心理学会第27回大会、2010年8月22日、子どもの城(東京)

岩田 美保・大元 千紘 年長児のお話
づくりにおける登場人物の内的状態への
言及—絵本の提示方法の違いに着目して—
日本発達心理学会第 21 回大会、
2010 年 3 月 27 日、神戸国際会議場（神
戸）

岩田 美保 就学移行期の子どもと学童
きょうだいを含む母子 4 者間の夕食時の
会話—学校・園についての話題およびそ
の変化に着目して— 日本教育心理学
会第 51 回総会、2009 年 9 月 20 日、静
岡大学 静岡キャンパス（静岡）

岩田 美保 幼児における物語の登場人
物の内的状態への言及—絵図版を手がかり
とした物語再生内容における「感情」
語の分析を通して— 日本発達心理学会
第 20 回大会、2009 年 3 月 23 日、日本
女子大学(東京)

[その他] (計 1 件)

・学会シンポジウム企画・司会

岩田 美保・仲本 未央 日本保育学会第
62 回準備委員会企画シンポジウムⅢ「子
どもとことば：今、子どもの側にたち言葉の
育ちを考える」2009 年 5 月 16 日 千葉大
学（千葉）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩田 美保 (IWATA MIHO)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：00334160